

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：天気の子

今回のテーマ

空想と反逆とエディプスコンプレックス

はじめに

この作品が描くのは、喪失感と社会への違和感を抱え、どこか現実から切り離されたような若者たちの姿である。主人公の森嶋帆高をはじめ、周囲の人々は皆、喪失が受け入れられず、彼らの心は空想と現実の中で揺れ動き、孤独を感じ、社会に馴染めないでいる。帆高が愛読書として持ち歩く「キャッチャー・イン・ザ・ライ（ライ麦畑で捕まえて）」は、そんな彼らの心の象徴とも言える。主人公ホールデン・コールフィールドが、大人たちの偽善や社会の不条理に絶望し、純粋な子供たちを守りたいと願う姿は、帆高たちの心の内を映し出している様に感じられる。

特に、帆高が警官隊を振り切り、自分の信念を貫こうとするシーンは印象的である。これは単なる逃避ではなく、社会の既成概念に縛られずに、自分自身の道を切り開こうとする若者たちの強い意志の表れである。この行動は、新海誠の前作「君の名は。」で、主人公たちが町内放送局をジャックし、変電所を爆発させたシーンとも共通する。どちらも、既存の秩序に反抗し、自分たちの声で社会を変えようとする若者たちの姿を描いている。

このような若者たちの行動は、精神分析的な観点から見ると、エディプス・コンプレックスとも関連があると言える。彼らは、社会という巨大な父親像に反抗し、自己のアイデンティティを確立しようとしているのかもしれない。

現代社会は、高度な情報化が進み、人々は様々なものに囲まれている。しかし、その一方で、若者たちは、コンプライアンス（規範・ルール）や効率性を重視する社会の中で、自分の個性を表現する場を失いつつある。この作品は、そんな閉塞感の中で生きる若者たちの叫びであり、同時に、自分たちの力で未来を切り開こうとする彼らの希望でもあるように感じられる。

その様な思いで、この作品を解説していければと思う。

今回のテーマ

I. 空想と現実の狭間で生きる登場人物

II. 「ハレ」と「ケ」から天気を読み解く

III. 警察官とエディプスコンプレックス

I. 空想と現実の狭間で生きる登場人物

主人公である森嶋帆高を取り巻く登場人物たちは、何かしら心の傷を抱えており、空想と現実の狭間で生きているように感じられる。そして「天気の子」は「キャッチャー・イン・ザ・ライ（ライ麦畑でつかまえて）」との類似点が多く見受けられると前回述べた。両作品とも、社会や大人の世界に対する違和感を抱いた少年が主人公で、巨大な父親像に反抗し、既存の枠組みから逃走する物語である。帆高もホールデン（ライ麦畑でつかまえての主人公）も、理不尽な大人社会に対する反発から逃避行を始める。東京での帆高の体験は、ニューヨークでのホールデンの放浪と重なる部分があるように感じられる。そして互いに理想を求め、放浪の旅を続けても、そこにはいつも生きづらさを感じている姿があったように思われる。事実、帆高は東京という大都会の匿名性の高い環境の中で、ホームレスに近い状況に陥ってしまった。

それはエディプス・コンプレックスからの逃避であり、大人という助けなしでも独力で社会で生きていけるという万能空想を抱くも、儚くも崩れたことを象徴している。

しかし、この物語における決定的な違いは、主人公帆高のその後である。ホールデンは物語を通じて基本的に変わらず、大人社会への不信と絶望を抱えたまま精神的な迷子状態で終わるが、帆高は、仕方なく須賀への助けを求めた。しかし一方でおそらく「この人なら自分の気持ちを理解してくれるかもしれない」という直感があったと考えられる。

これは帆高にとって**万能空想からの脱却**を意味する重要な瞬間でもあった。一人で全てを解決しようとしていた帆高が、初めて他者の助けを素直に求めた瞬間だったと言える。

しかし帆高が出会った人々は帆高と同じように心の傷を抱えた人々であり、彼らと交流し、互いに奇妙な形で支え合う中で、帆高は自分自身を見出していくようになる。

前回は東京で出会った人々、その一人一人について考察していった。

その人々とは陽菜、凧、須賀、夏美この4人であるが、この4人の心性に共通しているものは、**現実の喪失や困難を受け入れることができず、万能空想や否認によって現実から逃避しようとする心理構造**だと考えられる。

具体的には以下のような共通点が見られる

1. 喪失の否認

- 帆高：家族や故郷との関係の困難を否認し、独力で生きられるという空想を抱く
- 陽菜：母の死を受け入れられず、自分が母の役割を担うことで家族を維持しようとする
- 凧：母の死という喪失を否認し、姉に迷惑をかけないように自分を押し殺す
- 須賀：妻の死を受け入れられず、現実逃避的な生活を送る
- 夏美：大人になることへの不安を否認し、学生的な自由な生活にとどまろうとする

2. 万能空想による現実逃避

- 帆高：大人の助けなしに社会で生きていけるという空想
- 陽菜：祈りで天気を変える力という万能感、弟と二人だけで生きていけるという空想
- 凧：大人びた振る舞いで「センパイ」と呼ばれるほどの偽りの成熟
- 須賀：オカルトという非現実的な世界への投影
- 夏美：占いや迷信へののめり込み

3. 真の自立への困難

- 全員が真の意味での大人になること、現実を受け入れることに困難を抱えている
- 結果として、一時的な逃避や回避行動を取ってしまう

→帆高が上京して出会った人々は、この様に空想と現実の狭間で葛藤を抱えながら生きている。帆高と交流する中で、彼自身にも、そして彼らにも徐々に心の変化が起きていく。

Ⅱ. 「ハレ」と「ケ」から天気を読み解く

1) 「ハレ」と「ケ」

「ハレ」と「ケ」とは、柳田國男によって見出された、日本人の伝統的な世界観のひとつ。

- **ハレ:** 特別な日、儀礼、年中行事など、日常から離れた非日常的な時間や空間を表す。例：結婚式、お祭り、正月など。
- **ケ:** 日常生活、普段通りの時間や空間を表す。 例：仕事、家事、私たちが日々を送る中で経験する出来事。

日本では、戦後から高度経済を経て、大衆消費社会になったことで、派手な物、美味しい物が手軽に消費出来るようになり、ハレとケの区別が曖昧になった（どちらかと言えばハレが続いている状態になった）と言われている。

一方で、ある意味、現代社会を描いている「天気の子」では雨の日がずっと続いており、非日常的な空間などなく、常に同じ日々が繰り返されている。雨は登場人物にとって息苦しさ、孤独感、閉塞感を象徴している。

帆高も陽菜もそんな鬱積とした世界から抜け出したいと必死にもがいている。そしてこのことこそが、コロナ禍から今に続く、若者達の生きづらさを表しているようにも感じられる。

2) 帆高の「ケ」

先の登場人物紹介でも上げたが、帆高は高校生にも関わらず、鬱積した世界から抜け出そうと、自身が暮らす島を離れ、東京という新天地で心機一転、社会と関わろうとした。しかし現実 is 厳しく、なかなか仕事が見つからず、ホームレスに近い状態になり、雑踏な都会の海に飲み込まれそうになる。やむを得ず、東京行きのフェリーで出会った須賀圭介

に世話になる。(フェリーで甲板から海に落とされそうなところを圭介に助けてもらうシーンは、帆高の東京での生活の暗示の感じられる。)

帆高は須賀の仕事の手伝いをしながら、須賀、夏美との共同生活が始まる。そのシーンでは帆高は日々の活動に追われ、時に須賀に仕事で叱られながらもイキイキとした様に描かれている。小説版では次の様に書かれている。「僕はまた理解する。どんなに叱られてもちっとも辛い理由。僕が変化したわけじゃない。相手がこのひと達だからだ。須賀さんも夏美さんも、僕が家出少年であろうと関係ないのだ。当たり前の従業員として、当たり前頼ってくれるのだ。僕を叱りながら、お前はもうちょっとマシになれる、彼らはそう言ってくれているのだ。(略)それが僕の体を強くしているのだ。」

ここに象徴している様に帆高は須賀達に抱えられながらも、一人の対等な存在として扱われる中で、人間らしい生き方を取り戻し、大人への階段を登っていく。

→エディプス葛藤に向き合う準備となる。

そして上京して、困窮していたときに出会った陽菜と再会する。

3) エディプス葛藤と「ハレ」

路地で帆高は偶然に陽菜を見かける。しかしそのときの彼女は大人の男性二人に説得され、路地裏のホテル内に誘い込まれそうになっている。帆高はその様子を見た時、当初戸惑うが、バッグに入った拳銃を握り締め、彼女を助けに行こうとする。

しかしその試みはうまくいかず、チンピラのような金髪の男性が馬乗りになり、帆高は殴打されてしまう。(それがこれまで帆高が抱えているエディプス葛藤の再演が生じていると考える) 帆高は当初何もできず、悔しいと思い、拳銃を彼に向け、発砲する。そこで男二人は呆然として、その隙に陽菜は帆高の手をとり、朽ちた廃ビルに逃げ込んでいく。

→拳銃は「男性」の象徴であり、殴打され続ける中で拳銃を発砲したことは、帆高がこれまでの自分とは違い、大人達に立ち向かえる力を持っているということを誇示している様にも感じられる。しかしそれは社会的に好ましくない形での誇示である。そして帆高と陽菜のやりとりがある。

陽菜：君！勝手になにをするのよ！ ハンバーガーのお礼のつもり？……さっきの銃、なに？あなたなんなの！？

帆高：あれは……拾ったんだ、オモチャだと思って……。お守り代わりに持っていただけで――。

陽菜：なによそれ！？あんなの人に向けるなんて——殺してたかもしれないじゃん！

帆高：（息を呑む）ハッ……

陽菜：信じられない！気持ち悪い！最悪！！

陽菜は吐き捨てる様にいうと大股で歩き去っていく。

帆高は拳銃を手にし、それを見つめながら手を振るわせ、拳銃を投げ捨て、うずくまって
しまう。

しばらくして陽菜が戻ってくる。

陽菜：……私、バイト、クビになっちゃって。

帆高：……え？それって俺が——？

陽菜：別に君のせいじゃないけど……。……でもだから、稼げる仕事が必要だったの。

帆高：……ごめんっ、俺……勝手に…クッ…

帆高は涙を堪える　そこで微笑む陽菜

陽菜：ね、痛い？

帆高：え、いやっ、別に……！

微笑む陽菜

陽菜：君、家出少年でしょ？

帆高：え！

陽菜：わかるよ、そのくらい。せっかく東京に来たのに、ずっと雨だね…。　ちょっと来て！

陽菜に連れられ帆高は非常階段を登り、屋上に向かう。（略）

そこで陽菜が両手を組んで祈ると、陽菜と帆高の周りだけに光が差し込み、雨が止み、晴れていく。

帆高：晴れ女……？

微笑む陽菜

陽菜：私、陽菜。君は？

帆高：……帆高

陽菜：いくつ？

帆高：え……１６

陽菜：ふうん（上目遣いで、なにか品定めする表情で）…年下かぁ

帆高：え？

陽菜：私はねえ、えーと、来月で１８！

帆高：え！見えねえ！（略）

陽菜：よろしく、帆高

【考察】

帆高と陽菜が再開し、交流し、話の展開が始まっていくシーンである。陽菜は自ら進んで引き受けた風俗の仕事ではあったが、一方で引き受けたことに後悔の念も感じており、困惑していた様に感じられる。そこに帆高が体を張って止めてくれたことに感謝の念を感じている一方で、拳銃を持っている帆高にも疑心の念を抱いていたと思われる。それゆえに帆高に強い口調で問い詰めたのであろう。

そのことに加えて、ここで、「シン エヴァンゲリオン 劇場版」のシンジとゲンドウが対峙するシーンで「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」とゲンドウが告げたシーンを彷彿とさせる。そこにおいて、彼が告げた意味は、現実的に父を倒すことではなく、自身の内的な父親像を乗り越え、現実で父的な存在に恐怖を抱かず、お互いを深く理解し、認め合い、対等な存在でいられることと、このシンエヴァを扱ったときは述べたが、陽菜の帆高への思いはゲンドウと同じ思いがある様に感じる。

帆高が拳銃を所持しているという事実は、彼の内面の不安定さや、周囲に対する攻撃性を象徴していると考えられる。それは、エディプス葛藤において、父親に対する抑圧された感情が暴力的な形で現れる可能性を示唆している。陽菜が帆高をなじったのは帆高にそういう大人になってほしくない（そういう形でエディプス葛藤を解決しないで欲しい）。という陽菜の思いが込められている様に感じられる。

そこで、帆高が拳銃を投げ捨てたことは、暴力的解決はしないという象徴である。だからこそ陽菜は帆高に近づき、自らの秘密、彼女が「晴れ女」であることを教え、親しくなったのだろう。

ここで陽菜が「来月で18歳」と偽ったことが興味深い。彼女はまだ未成年だが、もう少しで成人になれるということ（もう少しで東京都青少年の健全な育成に関する条例の対象から外れること）、帆高より年上に振る舞いたいという思い、そして家出して身寄りのない帆高をかくまいたいという色々な思いが陽菜にはあった様に感じられる。（そしてお互いに対等になるには未熟なのだろう。）そしてなにより、帆高と対等な存在になろうとしなかったのだろう。それはとりもなおさず帆高に対して恋愛感情を抱くことを恐れていたようにも感じられる。そして帆高と陽菜は互いが希望の光（「ハレ」）の存在へとになっていく。

これから陽菜が晴れ女として、帆高と陽菜は晴れビジネスを展開していく。

4) 陽菜の社会的役割の獲得と自己犠牲と「ハレ」

帆高と陽菜が知り合い、お互い社会に溶け込めないで、同じ境遇の存在を知った喜びは互いにこの上なく、夢のようなものであったであろう。そこで帆高と日向は関係性を深めていくのではなく、昇華するかのように晴れビジネスを展開していく。そのビジネスは評判を呼び、瞬く間に広がり、メディアでも注目されるようになっていく。それは雨の日が続く束の間の「ハレ」の空間である。神宮外苑花火大会の日に陽菜が言ったセリフが象徴的である。

陽菜：この仕事。晴れ女の仕事。私ね、自分の役割みたいなものが、やっと分かった——
——ような気が、しなくも、なくもなくも、なくもなくもなくもない

この発言から陽菜はこのビジネスを通して自分が社会的役割を持ち始め、充実感を感じ始めている一方で、それでいいのか？という不安が混在した思いを語っているように感じられる。

しかしこの晴れビジネスは場当たりの発想であり、二人の置かれた困難な状況から目をそらすかのようなものである。一種の現実逃避であり、お互いが抱えてきた孤独感や不安感を否認する躁的防衛のような状況になっているように感じられる。

そして陽菜に関して晴れビジネスで瀧くんの祖母富美さんの家に訪れたシーンで

富美：旦那の初盆くらいは、晴れにしてやりたいと思ってね
と言ったのちに

陽菜：じゃあ、うちのお母さんも初盆なんだ……

といった言葉があまりにも人ごとのようにあっさりと会話が終始していたのが印象的であった。もちろん彼女らしくまわりを気遣い、心配させないようにそのように振る舞ったとは思えるが、母の死に対してある種の否認が働いているようにも感じられる。

以下のボウルビィのいう心理過程に沿って考えるならば、

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

- ①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）
- ②思慕と探求・怒りと否認の段階

(対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う)

③断念と絶望の段階(激しい失意、抑うつ体験)

④離脱・再建の段階(喪失を受け入れ、立ち直り始める)

①もしくは②の状況のように感じられ、陽菜は母の喪失を受け入れられず、母が生前の頃の生活を今も続けていこうとしているように感じられる。そしてそこで生じる葛藤を無かったことのようにしているように感じられる。富美さんは

富美：あの煙に乗って、あの人は向こう岸から帰ってくるんだよ。お彼岸。空の上は昔から別の世界さ

と言っているが、空の上を向こう岸(あの世)と考えることで、陽菜の母にまつわる情緒的葛藤を向こう岸へと排除させ、彼女自身の心を安定させようと考えていたのかもしれない。

次のシーンで神社の神主が夏美と圭介に龍の天井画を解説しながら天気の巫女について次のように言及している。

神主：天と人とを結ぶ細おーい糸がある。それが天気 of 巫女だ。人の切なる願いを受け止め、空に届けることのできる特別な人間。

晴れ女である陽菜は、まさに巫女のような存在だったと言えるだろう。

以前、番組で『君の名は。』を取り上げた際、主人公の三葉は高校生でありながら宮水神社の巫女を務めているという設定に着目した。巫女とは、神を祀り、神に仕え、神意を世俗の人々に伝える役割を担い、村の人々と神との間を繋ぐ存在、つまり村のアイデンティティの象徴である。吉本隆明は、巫女を「村の共同幻想と融合している」存在と捉えていた。(ちなみにアイドル達はファン達の共同幻想と融合しているように感じられ、アイドルはある種現代の巫女的側面があるのではないだろうか?)

一方で、三葉は一般的な高校生としての自我も持ち合わせており、巫女であることに違和感を覚え始める。この葛藤を乗り越えられずに、彼女は暮らす糸守町とともに、自身の自我をも失ってしまう。これは、自分の存在意義を晴れ女であることにのみ見出している陽菜にも当てはまる。

陽菜が晴れ女であり続けることは、三葉と同様に、彼女の自我の消滅を招きかねない。

この状況を変えるためには、『君の名は。』の瀧のように、陽菜の葛藤を受け止め、彼女を救い出す存在が必要となる。それが帆高なのである。